

和54年5月の気象学会で一部を発表したものの論文である。解析に用いた写真は52年度の卒業研究生によって撮影されたものである。吊し雲の観測に当って、地元の河口湖測候所、富士山頂測候所、足和田村役場、三ツ峠山荘、他多数の方々の援助を賜っていることに対し、この場を借りて感謝の意を表するものである。また、文献の収集に当っては、気象庁図書資料管理室及び東京管区気象台調査課の方々の御厚意を受けたことに深くお礼を申し上げる。

文 献

Abe, M., 1937: Distribution and movement of cloud around Mt. Fuji studied through photographs, 中央気象台, 1-15.

阿部正直, 1929: 気流の渦に生じた廻り雲の活動写真による研究, 気象集誌, 5, 149-160.

阿部正直, 1929: 活動写真による雲の動きから見た富士山の気流, 気象集誌, 7, 145-151.

阿部正直, 1930: 昭和三年十一月廿四日の富士山の風雲, 気象集誌, 8, 283-288.

阿部正直, 1932: 富士山の吊し雲に就て, 気象集誌,

10, 19-25.

阿部正直, 1939: 富士山の吊し雲と其機巧, 気象集誌, 17, 109-118.

阿部正直, 1939: 富士山の雲形分類, 気象集誌, 17, 163-181.

阿部正直, 1969: つるし雲, ダイヤモンドグループ, 総ページ.

菅原芳生, 1934: 吊し雲の観測, 天気と気候, 1, 72-76.

湯山 生, 1972: 富士山にかかる笠雲の統計的調査, 研究時報, 24, 415-420.

湯山 生, 1973: 写真による富士山の吊し雲の出現位置について, 東京管区気象研究会誌, 6, 149-152.

湯山 生, 1974: 富士山の吊し雲の位置の影による決定について, 天気, 21, 295-297.

湯山 生, 1974: 富士山の雲, 気象研究ノート, 118, 23-38.

大井正一, 山本三郎, 曲田光夫, 1974: 富士山の雲と大気の成層状態, 気象研究ノート, 118, 39-53.

佐藤 浩, 恩田善雄, 1974: 富士山周辺の流れと風洞実験, 気象研究ノート, 118, 55-64.

飯田睦治郎他, 1969: 91, 富士山, NHK ブックス, 日本放送出版協会, 106-140.

論 壇

研究発表の時のスライド考

内 田 英 治*

春の学会で数箇の研究発表を見ながらスライドについて次のように感じた。

近頃国際会議等ではオーバーヘッド・プロジェクター利用が増え、発表者は透明なオーバーレイに自由な執筆で研究内容を書き発表する傾向がある。しかし日本ではまだスライドを使う例が圧倒的に多い。

今回より講演企画の方でスライド枚数を制限し、6～8枚を標準とし、12枚を越えるとき歯止めをかけることありとしたため、20～30枚ものスライドをあれよあれよという間に開陳し量で勝負しようとする人はほとんどな

くなった。

一般にスライドを見る人の印象度は次の関係のように思われる。

$$I = g(r) \cdot S(T) \cdot C(e, T) \cdot E(p, i)$$

ここに、 I : 人に与える印象度

g : 発表者との距離 (r) の関数

S : 発表時間 $T (=t_1 - t_2)$ 内における発表の話し方の関数

C : T 内における気温、湿度、汚染度などの環境条件 (e) の関数

E : スライドの枚数 p とスライドの表現のしかた (i) の関数

* Eiji Uchida, 気象研究所

切角に歴年の研究を短時間 T 内に多くの未知の人に発表するのだから、専門外の人にもできるだけ良く印象づけるのに I を十分改良したいと思うのは人の常であろう。

ここに、 $g(r)$ や $C(e, T)$ は講演企画の方の御苦労によるものであり、 $S(T)$ は別の本質的意味があり、千差万別のこともあるので、とりあえず、 $E(a, i)$ を考えることとする。

このうち a も講演企画の方の御骨折で改良されつつあるが、 i が問題である。これによって他の条件を一定とすれば、 E は 2 乗 3 乗にも効いて良くなるかも知れない(?)。

ところで i の場合、①見やすさ、②わかりよさ、③印象づけやすさが 問題となる。

①については、(small sampling で申訳ないが) 線の太さが一般に細すぎると少し大きい r (遠いところ) ではおよそわからない。太い線で書けば必然的にごちゃごちゃする筆法は避けうるだろう。原理的なこと (または力点) をはっきり説明するにはごちゃごちゃ書かないことの方が一般に得策である。

②については、出来ればくどくど図の説明を聞かなくとも一目瞭然にわかれば一番よいが、ごちゃごちゃに書かれると①の問題が競合するのでおのずから限度がある。

図の内容から言って数枚似たものを見せる必要がある

なら、はじめの 1 枚と力点を強調して、あとはパターンを次々見せても良いかも知れない。文字も強いてレタリングを使わずフリーハンドでもよいのでないか。

また、図の中の線が交叉したりすることがある時には太線と細線をうまく配合でもしないと、識別がわるくなる。

カラーホイル (ふつうブルー色) を使うときは全般に濃すぎると文字が光りすぎて見ずらくわかりにくい。

また、縦、横の軸の単位については非常に遠くの方では見ずらいし、したがってわかりにくい。もちろん説明を要せざる文字は略字で結構であるが、一見してわかるように大きく単位を入れていただけると有難い。

③については、話し方も重要な問題であるが、図の表現の中に、ある一つのハイライトのトピックスを中心に説明が出来れば印象づけるのに好都合であろう。しかし、何もトピックスのみでなく地道な調査研究もあろうから、強いて変な強調はおかしいかも知れない。ただ、ここがポイントという所には出来れば図の中に印を付すとか、図の中の曲線を太くするとか、何か工夫があれば外から見て印象は深くなる。

その他、私だけが感ずる以外に多くのことがあると考えられる。また他の学会の動向も学びたいと思う。

終りに、会場のうしろはいつも弱い光をつけておくと、出入りにも、メモをとる時にも都合がよいと思った。